ちょうちん制作を媒介としたまちづくり活動の継続性と評価

—「手稲夏あかり」の10年間の活動を通して—

CONTINUITY AND EVALUATION OF COMMUNITY DESIGN BY “CYOUCHIN”

—Through the action called “Teine-Natuakari” for these ten years—

大垣 直明*¹, 谷口 尚弘*²

Naoaki OHGAKI and Naohiro TANIGUCHI

We have been tried to practice the action called “Teine-Natuakari” and give dream and excitement to children lived in Teine for these ten years. This is the action that students and children cooperate with making “cyouchin (Japanese Lanterns)”, exhibit these lanterns on square in Teine, and built new culture of Teine. This report is to evaluate the action for these ten years and consider the new development of this action in future.

We make clear through some researches how this action affect children, students, education system and so on.

Keywords : children, community design, “cyouchin”, contact among various generations, continuity of action

子ども, まちづくり, ちょうちん, 異世代交流, 活動の継続性

1. はじめに

1-1. 研究背景

高度経済成長期を経て、わが国の地域構造・地域環境は大きく変化し、子どもたちを取りまく住環境は悪化の一途をたどっている。その過程で、子どもたちにとって自然環境や異世代・異学年と触れあう体験が確実に減少し、時間的・精神的なゆとりの喪失、まわりへの無関心さ、創造性の低下などの状況を引き起こしている。こうした状況を改善し、将来のまちづくりを担う子どもたちに豊かな体験、とりわけ人間関係の形成と地域に対する愛着を芽生えさせる生活体験を創出する必要性が生じている。子どもの成長は、親との関わり、地域の人々との関わり、学校との関わりなどを通して達成されるものであり、家庭・地域・学校が協働で子どもたちを育てることの意義を的確に捉えるコミュニティづくりを展開していくことが必要であると考えられる。

一方、文部科学省では子どもが地域と関わる教育すなわち体験・経験学習と「ゆとり教育」の重要性を指摘しているが、教育現場では検討を開始しているものの、その対応に試行錯誤しているのが現状である。

これに対して近年、まちを探検・再発見し、地域の人々との関わりをなかで住環境整備を子どもたちと協働して創造しながら、子ど

もたちを育む実践的なまちづくり活動やその研究報告が全国各地で盛んに展開されている。これらのまちづくり活動が「まち学習」として教育現場と協働しあいながら子どもたちを育み、コミュニティを形成する有効性が検証されてきている。延藤は住まい・まちづくり学習において「子どもたちが楽しみながら環境体験を重ねていく方法により、内発的理性を生み出す」ことの重要性を指摘しており¹⁾、子どもたちとの協働作業・体験作業を通して子どもたちの内なるエネルギーの創出方法が求められているといえよう。

また、まちづくり活動のなかでワークショップ方式（以下、W.S.方式）が多くの場面で活用されている。倉原らにおけるW.S.によるまちづくりは「参加者各人・各主体の“学びの場”であり、そこでの価値観・生活観の豊かさが形成されるW.S.」の有効性と問題点を指摘し²⁾、また白井らはW.S.で対処しきれない場面も多々あり、まちづくり活動の多面性を指摘している³⁾。

本研究では、これらの研究に示唆を受けつつ、子どもたちが「新たな体験」（地域でのさまざまな協働作業や体験作業への参加）を通して、「新しい価値」を蓄積する（異世代との触れあいやものごとの関係性を学ぶ）ことの重要性を認識している。このことが「手稲夏あかり」活動を取組む直接的背景となっており、同時に、本研究の中心的背景ともなっている。

*¹ 北海道工業大学工学部環境デザイン学科 教授・工博

*² 北海道工業大学工学部建築学科 講師・博士(工学)

Prof., Dept. of Environmental Design, Hokkaido Institute of Technology, Dr. Eng.
Lecturer, Dept. of Architecture, Hokkaido Institute of Technology, Dr. Eng.

1-2. 研究目的と方法

本研究では、本学が立地している札幌市手稲区⁴⁾において、この10年間本研究室が中心となって手稲区内の子どもたちと大学生(以下、学生)との共作による「ちょうちんづくり」⁵⁾を媒介としたく手稲夏あかりの活動を主体的に仕掛け・取組んできた。この取組の趣旨は「(前略)その過程で、いじめや情緒障害などの子どもたちの心の成長に大きな歪みをつくり出しています。私たち大人は、いま、あらゆる手段を講じて、かれらに豊かな精神的環境を取り戻すことが必要な時期にきています。このく手稲夏あかりの企画は、手稲の子どもたちが自ら「ちょうちん」をつくり、それを展示・点灯することで手稲に住む子どもたちに夢と感動を与え、手稲への愛着を育むことができないか。そして、その数を年々増やし、手稲の文化・誇りを育てていこうという構想です(企画書原文)」で唱っている通りである。この活動がその開始から10回目を経過したことを機に、この活動プロセスを整理・評価し、その有効性を検証するとともに、今後の新しい展開に向けての条件・課題を考察することが目的である。

筆者らは本活動を提起しかつ主体的に関わりつつ、その活動に対する客観的評価を行うため、参加した子どもたちや父母および活動関係者の様子、学生たちの活動内容、活動の進行過程を探る「アク

ションリサーチ」の手法⁶⁾と数回にわたる小学校や父母・子どもなどへのアンケート調査を用いて分析する。

実施したアンケート調査を次に示す。第3・5・6回目に参加した小学校へのアンケート(1994年・1996年・1997年)、第7回目の参加父母へのアンケート(1998年、250票)、参加学生に対するアンケート(1993年~2001年)、第11回目に参加した子どもへのアンケート(2002年、176票)である。なお、参加学生に対するアンケートは取組みのつど、子どもたちの様子・学生の感想や問題点などを自由記述として記録したものである。

2. 取組みの発端と経過

10年間の手稲夏あかりの発展経緯を図-1、主な活動の過程を図-2に示しているが、活動状況をく生成期く展開期く発展期の3期に分け、それぞれの活動経過について簡単に述べる。

く活動の発端く 札幌市手稲区は平成元年10月に西区から分区し、それを契機に手稲区民まつりが毎年7月末に開催されるようになった。このまつりは区役所と連合町内会が中心になって組織されたが、住民の主体的参加に乏しいまつりであったため、本研究室ではこのまつりを媒体として新しいまちづくりの可能性について検討した。そこで「手稲に住む子どもたちに夢と感動を与え、まつりそのものを盛り上げる」新しいイベントを地域で育むこと、新しい区として

く制作形態く

A: 授業で学生が子どもと共同制作するパターン, B: 授業で先生が子どもに指導するパターン, C: 授業参観で学生と子どもと親が共同制作するパターン, D: 授業参観で先生が指導し子どもと親が共同制作するパターン, E: 授業で先生が5・6年生(高学年)に指導し、後日6年生が1年生、5年生が2年生、学生が3・4年生(中学年)と共同制作するパターン, F: 授業で先生が3~6年生に指導し、後日6年生が1年生、5年生が2年生と共同制作するパターン, G: PTA活動の一環で学生と子どもと親が共同制作するパターン, H: PTA活動の一環で学生が親に指導するパターン, I: PTA活動の一環で学生が一部の親に指導し、その親が他の親に指導するパターン, J: PTA活動の一環で習熟した親が他の親に指導するパターン, K: 指導なしで自宅等で制作するパターン, L: 習熟した親が他の子どもと親に指導しながら共同制作するパターン, M: 学生が親に指導し、その親が指導し、子どもと他の親が共同制作するパターン, N: 学生と高齢者が共同制作するパターン

* L, M, Nは幼稚園・保育園・児童会館等の小学校以外の団体である。

* 図中の○数字は参加組織数を示し、同一団体でも制作形態が異なる場合は別々にカウントした。

* 当日作業は、ちょうちんの保管・運搬・取付の作業に小学校・PTAが参加した状況を示す。

図-1 ちょうちん制作・当日作業の発展経緯

の精神的中心性を創出すること、異なる世代間の交流を推進すること、などを旨として大学生と子どもたちの共作によるちょうちんづくり（のちの＜手稲夏あかり＞）を提起した。

ちょうちんづくりを取組み始めたのは手稲区民まつりの第3回目（1992年）からであり、学生たちは低コストで子どもたちが容易につくれるちょうちんを提案し、本研究室が中心となって区内の子どもたちと一緒にちょうちんを共同制作し、区民まつりの会場を飾り彩る取組みを開始した。

＜生成期＞ 第1回目は保育園と児童会館に参加を呼びかけ、学生たちがボール紙に下書き・カットして材料を用意、障子紙に子どもたちに好きな絵を描かせ、一緒に組立てる方法（共同制作）をとった。計450個のちょうちんが区役所駐車場に飾られた。まつり自体は出店やビアガーデン・ステージといったありきたりの区民まつりであった。そのため、まつりを住民自身が主体的につくり、オリジナリティーの確立へと繋げていく必要性があった。

＜展開期＞ 第3回目からはまつり会場が手稲区北部の前田森林公園（カナル横：約600mの水路）に変更されたが、会場の規模拡大によりちょうちん数の増加が課題となった。これまでの保育園と児童会館のみでは少ないため、新たに企画書を作成し手稲区内の小学校に呼びかけた結果、区内16小学校のうち7校から参加希望があり、制作したちょうちん数は1152個に増加した。不参加9小学校のうち「やりたいが、今年度のカリキュラムが決まっているので今年度はできない」、「今からPTAに依頼するのは時期的に不可能」など依頼の遅れが問題とされた。そのため第4回目からは、前回より早い時期に小学校に企画書を持ち参加を呼びかけた。

前田森林公園の事情により第6回目はカナルから芝生広場、第7回目はふれあい広場（小学校跡地）と場所の変更を余儀なくされた。そのため、それぞれの会場にあった展示方法を企画・計画して対応した。また、ちょうちん数は第7回目が5719個と最高数を示し、参加小学校も区内全ての16小学校に拡大した。そのなかで、第6回目（1997年）には「札幌市都市景観賞特別賞」を受賞し、手稲夏あかりの参加者はもとより多くの関係者にこの取組みの手応えを与えた。

＜発展期＞ 1999年春、区役所・連合町内会は10年目の区切りということで次年度から区民まつりの廃止を打ち出した。それを機にちょうちん活動も中止・継続が検討されたが、これまでの活動に対する評価に加え、小学校や参加者からの強い賛同を得て＜手稲夏あかり＞と称する実行委員会を設立し、今日に至っている。また、会場は第8回目手稲プロムナード（緑道）へ移ったが、第9・10回は再びふれあい広場にもどり、以後この場所で継続することになった。

3. 手稲夏あかり 10年間の取組みで得た成果

3-1. ちょうちん制作が子どもに与えた影響

ちょうちん制作形態は授業での取組みとPTA活動の一環としての取組みが主流であり（図-1：制作形態の模式図参照）、それぞれに学生たちが加わって共同制作するパターンが中心である。この制作過程で子どもたちが得た成果は、参加父母アンケート結果（表-1）および筆者らの観察や子どもたちへの聞き取りによると以下の通りである。

＜自ら絵を描き、自ら組み立てることによる「創作の喜び」＞ 現代の子どもたちがちょうちんづくりに関心を示してくれるであろう

かという不安は第1回目から払拭された。子どもたちは楽しく一生懸命ちょうちんづくりに参加し、「平面が立体になっていくことへの驚き」、「出来あがったちょうちんをしばしばながめている子ども」など、目を輝かせて取組んでいた。その過程で、創造性や自立心（自分ひとりで完成しようという意欲）が育まれている。第5回目以降まつり当日に見に来ることができない子どもたちに対する配慮と、まつり当日への参加意識の向上を考慮して制作後に灯入れ（暗室、たとえば理科室や体育館などで制作後ろうそくをつけ灯を入れる活動）を試みた結果、どこの小学校でも点灯後は一斉に歓声があがり、さらに灯のついたちょうちんをもって動き回る姿が見られ、ちょうちんに対して強い興味を抱いていた。

＜自ら制作したちょうちんの愛着への芽生え＞ ちょうちん制作後「是非、返してね」、「まつり終了後にちょうちんを取りに来てちょうちんを家に持ち帰って飾った」など、自分が制作したものであるがゆえに大切にしようという意識、ちょうちんに対する愛着意識が芽生えている。このような子どもたちの反応を受け、まつり終了後、ちょうちんを各小学校に返却し、夏休み終了後に子どもたちに返却する方法をとっている。

＜まつり・文化への関心＞ 「まつり当日、会場に行かなくちゃ」、「ちょうちんを探しに行こう」などまつりへの関心が高まりつつあり、当日必死になって自分のちょうちんを探している姿が見られた。また、浴衣を着てまつりに参加し、終了後もちょうちんを手にさげて親と一緒に持ち帰るといった光景も見られ、地域のまつりとしての定着が進みつつある。

＜ちょうちんづくりの習熟や子ども同士の交流＞ 回を重ねるごとに、毎年ちょうちんを制作する子どもが増え、「ちょうちんのつくり方はわかるよ」とスムーズに制作している子どもたち、指導役（つくり方をみんなの前にでて説明する役）を子どもたち自身で勤めた

表-1 ちょうちん制作が子どもに与えた影響	
制作前	前回から楽しみにしていた(ちょうちんづくりへの期待)＜7＞
制作中	<div> 創作への喜び＜148＞ ・楽しそう＜90＞ ・イキイキしていた＜14＞ ・一生懸命だった＜44＞ </div>
	<div> <div> ちょうちんづくりの効果 ・創造性の育み＜59＞ ・自立心の育み＜14＞ ・平面が立体になる驚き＜11＞ ・子どもの成長＜11＞ ・ちょうちんの理解＜10＞ ・ものづくりの習熟＜8＞ ・ものづくりの習熟＜5＞ </div> <div> 他者との触れあい＜50＞ ・子ども同士の交流（助け合う・教え合う）＜23＞ ・親子の触れあい＜17＞ ・大学生との交流＜10＞ </div> </div>
制作後	<div> 灯を入れたときの感動＜30＞ </div>
	<div> 満足感・達成感＜27＞ 感動の持続性＜7＞ </div>
問題点	<div> 制作方法＜34＞ ・時間が少ない＜9＞ ・技術的難しさ＜14＞ ・指導方法＜11＞ </div>
	<div> 子ども＜14＞ ・創造性のなさ＜8＞ ・やる気のなさ＜6＞ 親が手を出しすぎ＜7＞ </div>

注1) 1998年度に実施したちょうちん参加の父母に対するアンケートの自由記述欄から、回答に含まれるカテゴリーを集計した。

注2) アンケート回収数249票、自由記述回答数211票。

注3) 表中の数字は回答数を示す。

		第1回目 (暴風雨) 1992.7.24	第2回目 (快晴) 1993.7.21	第3回目 (快晴) 1994.7.31	第4回目 (長雨) 1995.7.30	第5回目 (曇/雨) 1996.7.28
		区民まつり アトラクション部会				
場所		区役所駐車場	区役所駐車場	前田森林公園 (カナル)	前田森林公園 (カナル)	前田森林公園 (カナル)
目標・課題		・ちょうちんをまつりのシンボルにする ・主体的参加を検討 ・ちょうちんの制作行程を検討 ・子どもたちのちょうちんに対する興味の検証 ・展示方法の検討	・継続性への検討 ・自主制作への試み ・ちょうちんの改良 (雨風にも壊れないちょうちんの検討) ・展示方法の検討	・ちょうちん数の増大 ・手離れの準備 ・自主制作の可能性 (説明書を添付) ・展示方法の検討	・カナルをちょうちんで埋め尽くす (参加の拡大) ・自主制作の試み ・型紙の改善 ・運搬方法の検討 ・PR方法の検討 ・展示方法の検討	・展示装置の開発 ・自主的参加の拡大 ・コストの検討 ・開催時期の検討 ・ちょうちん制作終了後に灯をとす
改善	ちょうちん・架橋の ちょうちんづくりの取組み	・低コストでも簡単なちょうちんの開発 竿型 (木材) 展示 ・区役所でPR, 共同制作 ・保育園, 児童会館の参加 共同制作 450個 当日制作	・底ふたの取付け ・ゴムで枠組みに固定 トンネル型 (木材) 展示 ・保育園, 幼稚園, 児童会館の参加 530個	トンネル型展示 (2列で長さを前回の倍で展示) ・ちょうちんの返却開始 ・企画書制作 (区内の小中学校に参加と自主制作の依頼: 参加校7校) ・保育園, 子どもの会, 中学校の参加 共同制作+自主制作 1162個	・型紙をボール紙から薄いボール紙へ変更 ・ちょうちん紙を雲龍紙へ変更 ・業者に型紙を印刷依頼 ・展示装置の固定方法を改良 トンネル型展示 (2列で長さを前回の倍で展示) ・企画書, 模型, ポスターを制作しPR (自主制作, シンボル化の準備および説明: 参加校8校) ・保育園の参加 2127個	・型の見直し (寸法変更) ・固定方法の改良 ・展示装置の連結方法の改善 (木ねじからボルトとナットに変更) ・カットされた針金を活用 トンネル型展示 (2列で長さを前回の倍で展示) 区内13小学校の参加 3763個
子どもたちの様子・行動・発言		<交流> 大学生と園児 ・「当日, ちょうちんを見に行かなくっちゃ・」 ・「ちょうちんを探しに行こう」 ・保母さんは普段子どもたちが見せない表情に感心 ・作る行為を通して, ちょうちんに愛着が生まれていくプロセスを感じた	・ちょうちんを家に持帰る ・ちょうちんが組立っていく様子に興味津々 (平面の紙が立体的になっていくことへの驚き) ・住民からビールのさしいれがあった ・「はやく灯をいれろー」 ・「作り方おしえてー」 ・「来年も楽しみにしています」	<交流> 大学生と児童・小学生 ・ちょうちんを探しに, 多くの親子が来た ・「ちょうちんを持ち帰って家で飾ったよ」 ・「他の取組み (小学校での学校祭) で活用した」 ・「是非, 返して欲しい」 ・公園内は展示不可能であったが, 実行委員会の熱意により実現	・低学年も材料カット可能 ・「ちょうちんでカナルをいっぱいにしたい」 ・先生, 父母といっしょに制作していた ・「ちょうちんの作りかたはわかるー」 ・模型によるPR効果 ・取付・運搬・搬入作業に子どもたち・PTAが参加 ・取組みに対する積極的参加小学校の増加	<交流> 低学年と高学年 ・「早く, 灯をつけてー」 ・「できたよー。次はー」 ・朝早く, ちょうちんを取りに来た子どもがいた ・ノート持ってきて学生たちに「プロフィールを貸してー」 ・実行委員会の熱意によりカナル (水面) での浮かぶちょうちんを実現 ・運搬・搬入・点灯作業の全てをPTA・教員・子どもたちで取組む小学校がでてる
関係者の様子・行動・発言		・悪天候だったためちょうちんが崩壊 ・展示の迫力不足	・会場が狭小 ・トンネル型展示で連続性, 迫力の増加 ・PR不足	・行政からの規制 (花火フリーマーケットの禁止) ・呼びかけの遅延 ・低学年での一人での, 材料カットは困難 ・授業, PTAでの制作 (制作過程の多様性)	・公園の規制の緩和 ・雨天時の取付け方法の見直し ・主体的参加の拡大 ・資金の調達	・自主制作による大学生と子どもたちとの世代交流の減少 ・取付け作業, 運搬, 搬入作業量の限界
問題点を						
		生成期			展開期
		材料のカット	異学年制作	制作後学生と交流	架橋の制作
		教えながら制作	親子制作	灯入れ	架橋の搬入	

図-2 主な活動の過程

第6回目 (曇/晴) 1997.7.27	第7回目 (快晴) 1998.7.25	第8回目 (雨/曇) 1999.8.7	第9回目 (晴) 2000.7.30	第10回目 (曇/雨) 2001.7.22
区政10周年特別事業 夏あかりとして独立				
前田森林公園 (広場)	ふれあい広場	手稲ブロード (緑道)	ふれあい広場	ふれあい広場
展示方法の検討	展示装置の開発と展示方法の検討	展示装置の開発	展示方法の検討	展示装置の開発と展示方法の検討
参加学生の増加を検討 (他研究室および他大学研究室への呼びかけ)	他団体への呼びかけ	・区民まつり廃止に伴い ・ちょうちん以外の企画 (子ども対象) の検討 ・点灯時間延長の検討	・展示装置の改良 ・出店の企画と参加の呼びかけ	・ちょうちん以外の企画 (子ども対象) の検討 ・参加団体連携の検討
・展示連結方法の改善	・大型展示装置 (タワー) の開発	・ろうそくの大きさ、太さを変更		・大型展示装置の改良
トンネル型展示 (ハの字型展示)	トンネル型と大型で展示 (求心型展示)	トンネル型と大型で展示 (緑道同調型展示)	トンネル型と大型で展示 (雁行型展示)	トンネル型と大型で展示 (うねり型展示)
区内15小学校の参加	区内全16小学校の参加		・区内全小学校の参加 ・新一年生お母さんの集い参加	・区内全小学校の参加 ・幼稚園、高齢者団体の参加
5092個	5719個	5031個	5074個	4917個
			当日制作	
・「体育館、火事にならない? 消防車呼ばなくて大丈夫?」 ・高学年は低学年の方が早くできあがる (高学年は考えながら絵を描くため)	・数年継続している子どもはスムーズに作っていた ・遅い友達に親切に教えながら作っていた ・祭り当日浴衣を着て見に来、祭り終了後家に持ち帰っていた	・終わった後、「ありがとうございました」と自発的に口にした ・お母さんが作ろうとしたら「私がやる」と言って自ら進んで作っていた	・終わった後、自分のちょうちんを持ってきて「写真、撮ってー」 ・自分のちょうちんを家に持ち帰る子どもが多くなってきた	・作り方の説明役を小学生がやっていた ・「ストーブみたいで暖かい...。ストーブが消えたみたい。でもまだ暖かいよ」
・子どもたちより親が楽しんでいた ・I小学校において図工教材として、他の小学校でも生活科の教材として活用 (カリキュラムとして位置づける)	・「会場場所を固定しておいた方がよいのでは?」 ・「区民まつり以外の活動にも活用したい」と依頼 ・曙ロータリー倶楽部による取付作業の参加	・札労連による取付作業の参加 ・夏あかり独自活動への準備 (実行委員会設立の準備)	・他団体の参加の増加 (ロータリークラブ、札労連、指導委員会、子どもの会、お母さん達の集いの連絡会) ・「小学校の15周年記念行事に活用しました」	・札労連によるちょうちんづくり、取付、撤去作業の参加 ・シルバーふれあいセミナーの参加 ・フリーマーケット企画の提案
・親参加型の場合、親の手助けが過剰	・持込時のちょうちん数の減少 ・熱波での煽煽の曲がり ・場所の固定化	・盛上りの衰退 (出店の減少) ・火をともしまでの空時間の利用方法 ・実行委員会などの主体の創出	・子どもイベントの減少 ・他 (養護学校や高齢者など) への働きかけ	・実行委員会の若返り ・イベントの少なさ (フリーマーケット、出店など)
札幌市都市景観賞 (特別賞) 受賞	次年度から区民まつりの廃止決定		実行委員会の設立	区PTA連合会の会長が副実行委員長として着任
発 展 期				
架構の組立て	ちょうちん探し	第4回目 (昼)	第7回目 (夜)	
高齢者による取付	PTAによる取付	第6回目 (夕方)	第8回目 (昼)	

り、制作の遅れている友だちに教えあったりしている姿が見られ、人を助ける心が育っている。

＜異世代との交流＞ 学生との制作中の触れあいに加え、制作後、子どもたちが学生たちに「プロフィールを書いて」、「体育館であそぼうよ」など活発な交流が発生している。また、「親子の久しぶりの触れあいになった」との評価や「ものを作ることに真剣になっている子どもの姿を見てみると、私たち父母がもっと子どもたちとの時間を作り、一緒に何かを作り上げていく必要性を感じた」との父母の反省もみられた。

3-2. ちょうちん制作が教育活動に与えた影響

当初はこの取組みに受動的であった小学校も、回を重ねるごとに自主的に新たなプログラムを用意して参加している。この活動で教育面・PTA活動が得た成果は、次のような事項があげられる。

＜カリキュラム・周年行事としての展開＞ ある小学校においては図工授業の教材として活用し、また他の小学校においては生活科の単元にとり込み、ねらい・目標を明確にした教育プログラムとして参加している。ちょうちん制作は授業でも対応できることが実証され、地域学習の一環として位置づける小学校も増えている⁷⁾。また、全校で取組む小学校も5校あり、そのうち2校において開校20周年記念行事などの周年行事に子どもたちが制作したちょうちんを活用しており、ちょうちん制作は単に夏あかりのためだけではなく広く展開され始めている。

＜異学年交流への活用＞ 第5回目からSH小学校では異学年交流による制作が提起され実行された。これは授業で先生が5～6年生に指導制作し、後日、1年生と6年生、2年生と5年生、学生と3～4年生が共同制作する形態である。上級生は下級生の制作の手助けをしたり、制作後の灯入れ時に手をつなぎ連れ添ったりしている。これによって1～2年生は上級生に対する信頼感・安心感、5～6年生は責任感・年少者をいたわる心が醸成され、教育上の効果が得られている。このような異学年交流としての取組みはその後5校に拡大している。

＜PTA活動としての多様な展開＞ PTA活動での取組み方は、放課後希望者のみを集めて制作するケース、学年行事または学級行事を活用して制作するケース、希望者が自宅に持ち帰って制作するケースなど、多様な取組みをみせている。しかし、PTA制作形態において「親がいると子どもが親に頼ってしまう」、「親が一人でつくってしまう」場面が多々見られた。これらは創造の喜びを奪うと同時に子どもの自立心の低下を招いており、親の子どもとの関わり方に問題があることが伺われた。

各小学校でちょうちんを制作した後、大学で保管しまつり当日にちょうちんの搬入－取付といった一連の作業を学生たちが行っていたが、第4回目以降、小学校やPTAにその作業への参加を呼びかけた。その結果、第5回目には保管－搬入－取付に3小学校が参加、第10回目には6小学校、取付のみに2小学校が参加しており、ちょうちん制作だけでなく夏あかりの全行程・作業に対しても徐々に対応できるようになり、PTAが主体的に多様に活動し始めてきている（図-1）。

3-3. 若者（学生）のまちづくり参加意識の向上

学生たちは会場の配置計画－架構づくり－取付－点灯－撤去などハードな作業を中心に支えていることに加え、各小学校へのちょう

ちんづくりの指導に出向いている。その過程で、学生たちは「当日、灯りがついた時の子どもたちが喜んでいられるのを見ると嬉しくなる」、「子どもの表情が忘れられない」など子どもたちに対する感動・関心に加え、「みんなのパワーを感じた。参加した友達が前より好きになった」など学生同士の関わりにも新たな側面を発見している。また「こんな大きなことをやったのは初めてでいろんな意味で私にはプラスになった」など、子どもたちとの交流に加え、まちづくりへの参加意識の向上といった新たな価値が蓄積されている⁸⁾。

3-4. 取組みの拡大と多方面への影響

第7回目終了後、区民まつりの廃止が決定されるなかで夏あかりの継続について議論された。「子どもたちのためにも、継続しなければならない」、「子どもたちの灯を消すな」という強い意志が主流を占め、＜手稲夏あかり＞として新たな実行委員会を設立し継続することになった。これを契機に第7回目からは曙ロータリークラブ、第8回目からは札労連（高齢者の団体）が当日のちょうちん取付作業に参加、第9回目には体育指導委員会や子ども会連絡協議会、お母さんの集い連絡会といった団体が加わった。また第10回目に区P連の会長が実行委員会の副委員長として活動し始め、PTA主導への第一歩となった。この実行委員会は、前回に活動した団体によって構成されており、極めて流動的で柔軟な運営組織である⁹⁾。この実行委員会の流動化・柔軟さは新たな展開を生む可能性を秘めており、今後は区P連が＜手稲夏あかり＞の主体となるようなプロセスを展開することが課題である。

ちょうちんの拡大のいまひとつは苫小牧市、富良野市、倶知安町にも伝達され新たな取組みとして、他の地域でも拡がりをみせていることである。さらに、この活動に参加したN小学校よりPTAまつりの案内が毎年郵送されてきたり、本学大学祭にちょうちん制作に参加した子どもたちが遊びにくるなど、区内の新しいネットワークが生まれつつある。

3-5. ちょうちんの技術的向上過程と空間デザインの展開

＜手稲夏あかり＞が発展しながら継続してきた主要な要因として、子どもでも容易につくることができるちょうちんの提案と、その展示方法などの魅力をあげることができる。それらは回を重ねるごとに多くの改良が学生たちの手によってなされたが、それに多くの参加者からの提案も加わっている。

第1回目では暴風雨のためちょうちんが壊れたため、第2回目には雨への対応で底ふたを採用して強化、風にはゴムによる固定で揺れへの対応、第3回目の制作において「型紙が厚く、低学年では切りづらい」、「針金が硬くて折り曲げづらい」など小学校から指摘されたため、第4回目には型紙および針金を改良し、低学年でもカット・折り曲げを可能にした。第6回目にちょうちん材料を含め材質・つくり方や制作方法がほぼ確立された。

ちょうちんを取付る木材の枠組み（以後、架構）も改良・発展している。第1回目の竿灯型から始まり、第2回目には門型枠組み（トンネル型）に工夫され、子どもたち・人々があかりのなかを通るといった＜あかりのトンネル＞として展開されている。ちょうちん数の増加に対応するために、架構の連結システム¹⁰⁾にも工夫が加えられ、木枠を1連としてその単位を縦横に連結することで、自由で多彩な魅力的展示空間のデザインが可能になり、第6回目には八の字型展示、第7回目には求心型展示、第9回目には雁行型展示、第10

回目にはうねり型展示など、毎年配置デザインを変えながら魅力的な光の演出に成功している。また、第7回目から、子どもたちがつくったちょうちん群に中心性をもたせるため、タワー状の大型展示を加えた(図-2中の図を参照)。

4. 参加主体の「夏あかり」活動に対する評価

ちょうちんづくりに参加した子どもたち・父母・小学校へのアンケート調査結果から、夏あかりの活動に対する評価を分析する。

＜子どもの評価＞ 2002年に実施したTY小学校4～6年生の調査結果を図-3に示す。ちょうちんづくりの評価に関しては「とても楽しかった」が26.5%、「楽しかった」が60.2%と大半の児童が積極的な反応を示している。また、夏あかり当日会場へ出かけた児童は30.1%おり、徒歩圏を越えた地区であることを考慮すると、高い参加率とみることができる。当日の参加行動はちょうちんづくりの反応と対応しており、「とても楽しかった」と回答した児童の参加率は50.0%に上昇する。

＜父母の評価と意識の変化＞ 第7回目のちょうちんづくりに参加した父母に実施したアンケート調査結果から参加父母の評価と意識の変化を分析する。この取組みに対する参加父母の評価を次回への参加意識でみると、「是非、参加したい」が47.8%、「できれば参加したい」が42.9%と90%を超える父母が参加意思を示しており、ちょうちんづくりの活動に対して高く評価していることが伺える。しかも、その参加意思は参加回数が増加するほどさらに強くなっており、3回以上の参加者では「是非、参加したい」が66.7%に達する(図-4、右)。次に、夏あかりの当日会場に足を運んだ状況を見ると、「夜、灯のいったちょうちんを見に行った」が15.0%、「昼、見に行った」が20.3%であり、35%を超える父母が会場に足を運んでいる。この状況も参加回数と大きく関係しており、「夜、見に行った」父母は初めての参加者では7.4%に過ぎないのに対して、3回以上の参加者では75.0%と飛躍的に増加している(図-4、左)。このことは前述の参加意思の増幅と同様に、参加を重ねるほど、ちょうちんづくりの楽しさや当日のあかりの価値を強く認識する父母自身の自己成長の過程を示していると考えられる。

一方、参加父母が感じているこの活動の子どもたちへの影響を図-5に示す。高い評価として「創造性を育む」が61.8%、「夢と感動を与える」が58.5%といった子どもの内面に与える影響をあげており、ゲーム時代の子どもたちが自らものをつくることの重要性を認識していると考えられる。「親子の交流」が61.8%と高い比率を示すが、日ごろの親子の交流の少なさを反映していよう。これに対して、「まつりへの関心が高まる」が47.6%や「地域活動への関心が高まる」が26.8%とやや低い比率となっており、この取組みのまちづくりへの指向性についての理解の浸透が十分でないことが伺われる。しかし、これらの評価も参加回数が増えるほど大きく変動している。内面的影響はさほど変化しないが、他者との交流では「親子の交流」が大きく減少するのに対して、「大学生との交流」は増加する傾向にある。このことは初めての参加では自分中心の評価であったのが、参加を重ねるほど活動全体を見渡す視野の広がりをみせたと考えられる。同様に、「まつりへの関心が高まる」や「地域活動への関心が高まる」も参加回数が増えるほど上昇する傾向にあり、この取組みの地域展開への理解が浸透していく様子を伺うことができる。

このように、父母が参加を重ねることによって自分自身への価値の蓄積に加えて、この取組みの地域的意義についての認識の深化の構造を読み取ることができる。

＜小学校の評価＞ 数回にわたり参加小学校にアンケートを実施した。その自由記述から「これから地域活動教育を実践しなければならなかったため、この活動は非常に役立ちます」、「地域で子どもたちや親と一緒にものをつくる機会が減ってきており、大変有効な活動だと思っています」など、この活動に対する積極的な評価を示している。このことが3-2で述べた小学校側のさまざまな主体的取組みの展開背景となっている。

図-3 子どものちょうちん制作の反応と当日参加の関係

図-4 参加回数と参加状況および参加意志

図-5 参加回数と子どもたちに与える影響

5. 活動を支えた条件

この活動は10年を経過したが、その時々の問題点を検討・改善しながら拡がりをみせた。この活動が10回継続してきた背景として以下の条件があげられる。

＜ものとしての有効性＞ ちょうちんという「もの」としての有効性・優秀性がこのまつりを根底から支えた。すなわち、比較的簡単につくれる(制作容易性)、自分たちで好きな絵が描ける(オリジナリティ性)、平面が立体に変化する(形態変化性)、あかりの特性(あかり効果)、さらに群となった時の空間的魅力などである。ちょ

うちんづくりを通して子どもたちは能動的な行動・表情・反応をみせ、一個のものを多数集めることでまちづくり活動が有効に展開していくことが伺えた。

＜教育方針との合致＞ 近年、教育方針が「ゆとり教育」や「地域との関わり」などを中心に展開されているが、今回の活動が近年の教育方針と合致していたことがこのまつりを展開できた大きな背景となっている。この活動が親子・異学年・異世代との共同制作を中心にしながら、さらに地域活動へ展開していくストーリーが小学校関係者にスムーズに理解された。

＜学生エネルギーの存在＞ この取組を支えた学生たちのエネルギーは膨大である。彼らがこの取組で蓄積した成果が、次の学年へ伝達され、毎年数十名の学生たちが継続してこの活動に参加した。その輪は回を重ねるごとに研究室の枠を越え、広がりを見せた。

＜継続することによる地域エネルギーの拡大＞ 回を重ねるに従って参加主体の増加とこの活動に対する理解の浸透や意識変化がこの取組を支えた重要な条件である。活動を継続する過程で、参加主体はエネルギーを増幅させながら、新たな価値を蓄積し始めている。

上記4つの条件が有機的につながり、年々その輪を広げながら、この活動を支えてきたと位置づけている（図-6）。

図-6 活動を支えた条件と広がり

6. 今後の課題

＜数の減少＞ 近年の少子化にともない、ちょうちん数も頭打ちになってきている。子どもたちを育むといったソフト面の活動であることを重要視しつつ、空間的魅力向上を考慮すると一定数のちょうちん数が必要である。これまでの参加団体以外、たとえば養護学校や老人ホームなどといった団体へも参加を働きかけて、多様な取組を展開しつつ新たな価値の創出という側面も必要であろう。

＜主体の移管＞ これまでは本研究室（学生）が主体となって活動してきたが、主体を地域に移行していく必要がある。しかし、学生が単に手を引くということではなく、異世代交流などの価値を大事にしつつ、学生依存システムと住民主体システムのバランス、すなわち両者が協働して今後の展開を検討しながら子どもたちを育むことを配慮しなければならないと考えている。

＜資金的課題＞ この取組の費用は市からの援助金（30万円）、企業等の団体からの協賛金（50万円）で賄われているが、近年の経済不況で協賛金の確保が困難になってきている。その支出の大半はちょうちん材料費（50～60万円）であることから、参加者から100円程度の材料費を徴収してはという意見が実行委員会では出されているが、継続審議となっている。

＜他の企画の提案・実行＞ 区民まつりの廃止により、出店やステージ演芸などを含め、子どもたちを遊ばせる企画が少なくなっている。これを地域で担うような新たな活動を展開する必要がある。

なお本稿は、大垣直明：小学生と大学生の共作による「手稲夏あかり」の取組み（住まいの地域性と住教育）、1998年日本建築学会大会建築経済部門PD資料集、pp.49～50、1998.9に新たな分析を加え再構成したものである。

【注 釈】

- 1) 延藤は住まい・まちづくり学習を「子どもたちがまわりのハード・ソフト両面の環境と親密に交わり、そのなかで多様で豊かなくかわり」にめざめ、愛着を覚えるとともに、そのくかわり」の質をよりの確なものに変容していく発想と行動を吸収する」と捉えている（参考文献1）。倉原は子どもを主体とした体験的・持続的なまちづくり活動において、くかわり」の重要性を指摘し、子どもたちの発想と創造がこれからのまちづくりのなかで重要であることを指摘している（参考文献2）。
 - 2) 倉原は、今日 W.S.が形式的に活用されていることを危惧しつつ、W.S.に関わる各人の価値観・生活観の向上、さらに「学習の場」としての有効性を指摘している（参考文献3）。
 - 3) 白石らは W.S.に対応しきれない個性やサイレントマジョリティへの働きかけについて指摘している（参考文献4）。
 - 4) 手稲区は札幌市の西部に位置し、平成12年9月30日現在の人口は135997人であり、10区中最も持家の比率が高い（札幌市平均45.5%、手稲区65.9%、平成7年10月現在）住宅地である（参考文献5）。
 - 5) ちょうちん材料は、和紙（障子紙をカットしたもの）と型を印刷した厚紙、3本の針金（2本は太く、1本は細い）、銀紙、輪ゴム、ろうそくであり、1個当たり単価は約100円である。制作過程は和紙に絵を描き、その上部と下部に2cm巾の厚紙を貼り、円状に丸め、円形のふたを上下（上は中空ふた）にセットして完成。2時間の点灯が可能である。
 - 6) アクションリサーチの手法はまちづくり研究のなかで確立しつつある。乾らの「価値づくりの計画」では、全体的な観察による知識の蓄積、またく研究」とく実践」のギャップを埋める手法としての有効性を示している（参考文献6）。
- また倉原らにおける一連のまちづくり研究において、自ら地域にアクションを仕掛けることで、一連のプロセスに身を浸すことでの動的関係を見いだす手法としての有効性を指摘している（参考文献2）。
- 7) SH小学校において、「広げようふれあいの輪」を標榜しており、この活動をその実践として評価している。
 - 8) 参加学生数について本研究では触れていないが、若干の説明を以下に示す。最初は本研究室学生約10名程度で活動していたが、作業量の急激な増加に伴い10名程度では賄いきれなくなり、第6回目から趣旨に賛同する他研究室学生・大学院生・他学科学生および他大学学生に積極的に参加を呼びかけた。第6回目では28名、第7回目には33名、第10回目には50名の学生が参加し、昨年度までの活動に参画した学生数は数百名に及んでいる。
 - 9) 第10回実行委員会の構成団体を以下に示す。手稲区内小学校、手稲区内小学校PTA連合会、北海道工業大学大垣研究室、同大学 Architectural クラブ、同大学美術部、札幌曙ロータリークラブ、手稲区子ども会育成連絡協議会、札幌連大学手稲区同窓会、手稲区体育指導委員会、お母さんの集い連絡会など、労働提供する団体である。
 - 10) ちょうちんの架構はW1500×D1800×H2000であり、一連48個のちょうちんを吊すことができる。

【参考文献】

- 1) 延藤安弘：子どものための住まい・まちづくり学習の考え方ーホリスティックな環境観・教育観ー（住まいの地域性と住教育）：1998年日本建築学会大会建築経済部門PD資料集、pp.27～32、1998.9
- 2) 倉原宗孝：子どもたちの体験的・持続的なまちづくり活動の意義と評価ー札幌市手稲区における「こどもまちかど解決隊」の5年間の活動を通してー、日本建築学会技術報告集第12号、pp.199～204、2001.1
- 3) 倉原宗孝：市民まちづくり学習としての住民参加ワークショップに関する考察、日本建築学会計画系論文集第520号、pp.255～262、1999.6
- 4) 白石昌之、横山俊祐、武藤剛：住環境整備事業からまちづくり活動への斬新的展開にみるワークショップの課題ー筑紫野市S地区における住環境整備事業のケーススタディー、日本建築学会計画系論文集第536号、pp.199～206、2000.10
- 5) 第26回北海道市町村勢要覧、北海道統計協会、2001.10
- 6) 乾亨、延藤安弘、森永良丙：価値づくりの計画プロセスにおける住み手の計画側への役割の浸透ーユーコート計画プロセスにおける住み手とコーディネーターの相互浸透性1ー、日本建築学会計画系論文集第446号、pp.53～63、1993.4

（2002年5月10日原稿受理、2002年11月28日採用決定）